

氏名	VIRAG VIKTOR		
学位の種類	博士（社会福祉学）		
学位記番号	甲第 63 号		
学位記授与の日付	2016 年 3 月 18 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
学位論文題目	<p>日本における効果的な多文化ソーシャルワーク教育プログラムの構築</p> <p>文化的力量のある社会福祉専門職の育成に向けて</p> <p>Developing an Effective Educational Program for Cross-cultural Social Work in Japan To Train Culturally Competent Professional Social Workers</p>		
論文審査委員	審査委員長	佐藤 久夫	
	審査委員	植村 英晴	(主指導教員)
	審査委員	北島 英治	(副指導教員)
	審査委員	小原 眞知子	
	審査委員	斉藤 くるみ	

日本における効果的な多文化ソーシャルワーク教育プログラムの構築
文化的力量のある社会福祉専門職の育成に向けて
(論文要旨)

本論文の目的は「日本における文化的に多様な人々に対応できる能力、即ち文化的力量をもつソーシャルワーク専門職の効果的な教育プログラムの構築」であった。最初に、実証研究に向けた基盤研究に従事した。日本における文化的な多様化と文化的に多様な人々の周縁化を示す既存の統計データと、ソーシャルワーク実践及び教育に係る文化的な多様性に関する国内外の専門基準の調査を行い、研究の社会及び専門的背景と意義を示した。国内外の先行研究の検討から、文化的力量モデルの採用を結論づけた。移民国家4カ国の訪問調査を実施し、文化的な多様性に関するソーシャルワーク教育の比較検討から、文化的認識とそれを促す参加型教育の重視を指摘した。次に、教育実験による介入研究のために基礎材料を作成した。ラムによる「ソーシャルワークにおける文化的力量の自己アセスメント・テスト」の日本語版を作り、A大学における調査で信頼性と妥当性について検討した。また、国際的な専門書等を参考に、採用した理論枠組みに沿って、文化的力量の3領域（認識・知識・技術）と24要素を網羅し、導入・認識・知識・技術編からなる教育プログラムを作った。最後に、A大学において介入群と統制群を設定し、プログラムによる教育実験を実施した。プログラム効果を、作成したテストによる量的分析と、自由記述内容のラベル化・カテゴリー化による質的分析で確認した。量的研究では文化的力量全体及び認識・知識・技術の3力量領域の向上を、質的研究では、学習効果・意識変容・行動意欲の3種類のプログラム効果と参加者によるプログラム、特に認識編の肯定的な評価を確かめた。よって、研究目的が達成された。

Developing an Effective Educational Program for Cross-cultural Social Work in Japan
To Train Culturally Competent Professional Social Workers
(Paper abstract)

The purpose of this dissertation was to ‘develop an effective educational program to teach cultural competence to professional social workers in Japan’.

First, I engaged in ground research towards empirical research. I surveyed existing statistical data on the cultural diversification of Japan and the marginalization of culturally diverse people, and international and domestic professional standards on social work practice and education associated with cultural diversity, and showed the social and professional background of the study and its rationale. By examining prior research, I concluded on adopting a cultural competence framework. Based on field surveys to four immigrant nations and comparison of social work education related to cultural diversity, I indicated focusing on cultural awareness and participatory learning for facilitating it.

Next, I prepared basic material for an intervention study by an educational experiment. I prepared a Japanese version of the ‘Social Work Cultural Competencies Self-Assessment Test’ by Doman Lum and studied its reliability and validity through a survey carried out at College A. Also, based on international textbooks, I formed an educational program consisting of introductory, awareness, knowledge and skills parts according to the adopted theoretical framework covering the three cultural competence areas (awareness, knowledge, and skills) and 24 competencies.

Finally, I set up intervention and control groups at College A and conducted an educational experiment using the program. I confirmed program effectiveness by quantitative analysis using the prepared test, and by qualitative analysis through labeling and categorization of free comment data. In the quantitative study, I confirmed the increase of overall cultural competence and the three areas of awareness, knowledge, and skills. In the qualitative study, I observed three types of program effectiveness, namely learning outcomes, change of consciousness, and desire to act, and also positive evaluation of the program by participants, especially of the awareness part. Hence, the purpose of the research was fulfilled.

【審査結果の要旨】

1 審査委員の構成と審査の経過

博士論文審査は、日本社会事業大学大学院学則、同学位規定及び同博士後期課程修了細則に基づき、第3次予備審査及び最終審査から成り立っている。審査委員は、社会福祉学研究科委員会にて選任された大学院担当の専任教員5名が担当した。5名の氏名と専門分野は以下のとおりである。

審査委員長	佐藤 久夫	障害者福祉
審査委員	植村 英晴	障害者福祉
審査委員	北島 英治	ソーシャルワーク論
審査委員	小原 眞知子	ソーシャルワーク理論・援助技術開発
審査委員	斉藤 くるみ	英語学、言語学

2015年10月30日までに提出された第3次予備審査博士論文について審査委員がそれぞれ精読し、11月28日の公開口述試験を受けて、各審査委員の指摘事項を審査委員長がとりまとめ1月22日までの修正を認め、審査委員会は指摘事項に対応した論文の提出を受けて審査を行い、5名の審査委員全員が第3次予備審査の評価を合格とし、審査委員会においての合格が了承された。次いで、2月5日までに最終審査及び最終試験の申請がなされ、審査委員会は、提出された本論文は博士（社会福祉学）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達し、審査委員5名連名による「博士論文最終審査及び最終試験結果報告書」が作成され、2016年2月18日の社会福祉学研究科委員会に審査結果を提案し了承を得た。本学学長は、これらの手続きを経て、2016年3月18日に「博士(社会福祉学)」の学位を与えることとした。

2 博士論文の評価

本論文は、「日本における文化的に多様な人々に対応できる能力、即ち文化的力量(cultural competence)をもつソーシャルワーク専門職の効果的な教育プログラムの構築」を研究目的としている。この分野は、国際化、グローバル化が進む中で、我が国において十分に組み込まれてこなかったものであり、その社会的意義は大変大きい。本研究は中でも専門職養成のための教育プログラム開発という、重要でとくに新しい課題に焦点を当てている。研究の準備段階として、国内外の詳細な文献調査、それにもとづく理論枠組みの整理、米国など先進4か国の学士課程への訪問調査、倫理的配慮などがなされた。本研究の中心は、米国の多文化ソーシャルワーク教育プログラムを翻案し、社会福祉学部の学生に教育的な介入実験を行い、その結果を量的・質的に分析し、その妥当性・有効性を検証したことである。この教育プログラムは、文化的力量枠組みの3領域(認識・知識・技術)と24要素を網羅し、導入編・認識編・知識編・技術編から構成され、参加型学習を促すものである。また、その検証に必要な効果測定ツールを開発すべく、「文化的力量」に関する英文の標準化されたスケールを、作者の承諾を得て邦訳し、信頼性と妥当性を確認し、介入実験に使用した。文化的力量に関する学習効果を測定する有効な日本語のツールが開発されたといえ、この点も本研

究の大きな成果といえる。今後、より量的にも多くの、かつ多様な属性をもつ対象者(学生・院生・学年・文化的背景)を対象とした介入研究や、多様な文化的背景の担当教員による介入研究など、より一般化するための取組が期待され、そうした今後の検証に十分値するオリジナルで信頼性のある知見が得られたといえる。以上から、博士論文として十分な水準に達していると評価した。なお、今日の世界はテロの脅威にさらされ日本も例外ではない。こうしたテロの背景に文化・宗教・民族の間の社会的格差と無理解の問題が指摘されており、ソーシャルワークはこの問題の解決に一定の貢献をなしえる社会的な対応である。Virag Viktor氏が本論文の執筆を開始した時以上に今日ではこの研究の重要性が増しており、このテーマでの今後の氏の一層の研究を期待する。

3 最終試験の結果

本論文は、本論文は、「日本における文化的に多様な人々に対応できる能力、即ち文化的力量(cultural competence)をもつソーシャルワーク専門職の効果的な教育プログラムの構築」を研究目的とし、米国で開発された文化的力量を評価するスケールの日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を確認し、文献をもとに開発した教育プログラムを実施し、そのスケールを用いて有効性を検証したものである。この博士論文には、高度の実践的研究能力や幅広い社会福祉学の学識が伺われ、また、口述試験その他の審査過程を通じて学術的誠実な対人関係能力が伺われた。博士(社会福祉学)にふさわしい実践的研究能力と学識を有していると評価する。